

伊藤銀月先生著

最新研究
忍術
妖術

東京

梁江堂發兌

伊藤銀月先生著

最新研究
忍術妖術

東京

梁江堂

發

と 彼 經 人

伊藤銀月先生著

最新研究
忍術妖術

東京

梁江堂發

妖術の新研究……………	七一
妖術とはどんなものか……………	七一
鼠となる術……………	七六
蝦蟇の術(上)……………	八三
蝦蟇の術蜘蛛の術其他(下)……………	八九
火遁の術……………	九五
忍術の實地試験……………	一〇二
銀月自ら忍術者の實習を見る……………	一〇二
忍術と妖術と仙術……………	一〇九
忍術者が心身鍛練法の或一面……………	一〇九
毘野陸武氏に與ふる書……………	一一五

本書の挿繪

星かけ……………	七
行脚僧の實驗……………	三七
忍び六法……………	四七
鳶の嘉藤次……………	六一
若菜姫……………	七三
仁木彈正……………	七七
鞠川玄蕃……………	七九
藤波由縁之亟……………	九三
犬山道節……………	九七

目次

忍術の新研究……………	一
強れ者惡戯者……………	一
忍術とはどんなものか……………	一〇
忍術の堂奥に屬する部分……………	一六
呼吸を整へる練習……………	二二
身軽く動き足疾く歩く練習……………	二九
誰にも出来ない平凡の術……………	三五
誰でも出来る不思議の術……………	四四
變と難とを堪へ凌ぐ練習……………	五一
武藝柔術其他器械的練習……………	五七
日常生活に應用すべき忍術と催眠術との關係……………	六五

相並び、青年の仰慕、頗る厚きものあるに至れり、其の經歷を觀るに秀吉のそれに、類似するものあり、蓋し銀月の如きは、之れを商人たらしむるとも、軍人たらしむるとも、文士として彼が贏ち得たる程の名を保たんことは易々たる可し、秀吉は家康に比して、華美を好み、陽氣なことを好み、奇を好み、銀月に亦たこの性僻あり、此の性僻は彼れをして一方に成功せしむると同時にまた彼を破れり。此を知らんとならば、まさ女史の小説『平凡さひ』を緇け、哥の面目を窺ふを得ん。人有り曰く、銀月は法螺吹きなりと、然り銀月は法螺を吹く男ならん、されど悲しいかな現代文士の多くは意氣頗る揚らず、よし法螺に止まるとするも、吾人は銀月の言を壯とするもの多々なるを喜ぶ彼曰く

自分は將來何かやらうと思つて居る、今の二十や二十一二の青年を見ると、其のいやに老成して居るのに驚くのである、い

かにも大人振つて吾輩のやうな子供の心で居るものとは話が合はないのが多い。我輩二十四五の時に自分をまだ子供だと思つてから十餘年このかた少しもフケないやうである自分もさう思ふし人もさう云ふ。

何かやらうと思ふといつて、銀月哥、頃日、眞面目に忍びの術に身も魂も打ち込んで居るさうな。睫毛に止りて目を逃れよと、燈臺の下に萬兵を伏すべしとかいふ秘訣に合するやうにと、物理的に研究して居るとか傳へ聞く、奇を好む哥は何を遣り出すか分つたものぢや無い、何にせよ、哥は哥の特色を發揮して、小文士の列を遠く脱して、痛快な天下を動かすやうな事をやれ。

か、ポートレエルが何だとか、ゴンチヤロフが何といったとか、謂はなければ、耻かのやうに思ひ、下らぬ問題、殆んど説明も辯論も要しないことにまで口を入れなければ人に後れたかに焦心、煩悶し、自己の姓名の、新聞雑誌に載るといふよりは、自己の愚を一般に知らせると氣附かず載せたがることに急であつた、昨年度の僕見たいな量見で居る自稱文士、自稱詩人とは違ふ、文章詩歌は自分の意見感情なりを表白するに便利な者であれば、無暗に引籠思案するのも宜くないが、所謂當今の青年文士の多數のやうに名ばかり求むるに急で、その安つばい文士といふ名を失墜しないやうにと、そんな小さい所にクヨクヨして居るのは、餘り賞められたものでなからう勿論人は、自家を吹聴廣告するを悦ぶ者だ、僕とても其一人でないとは云ばない、此處に此な事を書いて、かく云ひ乍ら自己の愚を表白しつゝあるのだから、今

とて、えらさうな口は利かれないが、併し、希望は見識を深くし高くし、今の僕、今時の文士といふ者の多數とは異ならうと念じて居る。語を換へて言へば、文士として優れる前に、人間として優りたい。此處だ、此處が銀月と吾輩が意見が合ふ。銀哥が、豐太閤を戀人だといふのは彼の心の聲だ、口先きだけの聲でない。彼は、小さい時から随分脱臼であつた。而て未來の蒙古王を以て自ら任じ、其爲めに心身を鍛練したと云つて居る。彼、一度は足尾銅山坑夫の下働きとなり土方の手傳ひをなし乞食同様の眞似をなし、一度は臺灣にあつて樟腦製造業に従はんとし、一度は田舎の雑誌記者となり、萬朝報の黒岩周六に書を寄て、忽ちに新聞記者となり、一種奇妙な健筆に人を酔はせ、二六新聞社に入て、才媛竹内まさとも懇懇を通じ再び萬朝社に歸りまさ女を迎て妻とし、時に小説を書き時に紀行文を書き時に評論文を草し、聲名大町桂月と

伊藤銀月氏

正富汪洋君評

(東京エコーに掲載せられたる
一文を乞ひ得て序に代ふ)

銀月哥、名は銀二、明治四年十月二十一日、秋田市は趣訪町に生れた。銀月、口を開けば則ち言ふ、『乃公は所謂今の紛々たる文士ぢや無い』又曰く、『乃公の戀人は攝政關白豐臣太閤だい』と其言ふ所に違はず、哥は當今の、青い面をして、豆腐ばかり喰つて、何でも無いことをワイワイ騒ぎ廻り、針の端で突いた程のことを、天下の大事のやうに心得、平凡な詩歌をこれ見よがしに、書きつられ神經衰弱を誇りのやうに考へ、風が白いか、岩が笑ふとか、何とか彼とか珍妙なことをほざき、ヤレ、カスカーソイルドが如何したと

明治新書
最新研究
忍術と妖術

伊藤 銀月 著

忍術の新研究

◎強ね者いたづら者

(1) 術 妖 と 術 忍

何新聞かに、銀月は忍術の研究をして居るさうだが、豈夫食ひはぐれて泥棒をやる氣でもあるまいと書いてあつたと、我輩は見ないが、人が来て知らして呉れた。全く其通りだよ、人は誰でも三分の泥棒根性のないもの

が無いと云ふから、我輩とても先天的泥棒根性を持つて生れたに相違無い、寧ろ、普通の人が三分なら我輩などはそれを五分も六分も持つて居るかも知れないのであるけれども、縦令我輩は泥棒を試みやうとする者であつても、忍術は決して泥棒術でないから、これを利用する譯には行かない、假に又これを泥棒術だとしても、今の世の中のやうに泥棒が容易く出来るのでは、忍術も妖術も要つたもんではない、今の世の中で泥棒をやるには、麻酔劑さへあれば十分である、それも醫者の證明が無ければ買はれぬ藥品なら些と面倒だが、冗談ぢやない、今の

世の中では砂糖迄が麻酔劑の働きをするんだよ、之れに中てられて泥棒の手先になつた代議士が澤山あるぢやないか。
閑話休題、世の中が色と慾とに固まつて、榮耀榮華を極めやう美人を自由に弄ばうとの争ひを、露骨に腕ッ節でやる戦國時代には、人材盡く武門に集まつて、其他の方面には屑ばかり残る事になる、すると又、たつた一人で時代に反抗し、天下の英雄豪傑を十六羅漢の木像が並んだ程にも思はず、自在にそれ等を翻弄して打興する所の、途方もない強ね者いたづら者が必ず出て来る、昔支那の

三國時代に魏の曹操が姦雄の資を以て天の時を得たとある、所がこゝに左慈字は何とか云ふ妖術使ひが現はれ、天遁地遁人遁三卷の天書を得て能く通力自在なるに至つたと稱しつゝ、曹操の前に出しゃばり、散々悪戯をして曹操を悩まし、到頭一世の姦雄を激しい神経病に罹らしめた、此妖術は忍術の一種である、即ち妖術使ひの左慈は忍術者の左慈である、「さじ」は「さじ」でも、本願寺の坊さんからユニテリアンになつて而も金儲の上手な佐治實然先生とはちがふのである、それから、我輩の親分秀吉を拈り殺さうと忍び込んで遣り損ひ、あべこべに秀吉を

天下第一の大泥棒と罵倒して釜揚げにされた石川五右衛門、一國一城の主は愚か、一方の旗頭ともなり得べき可惜器量を持ち乍ら、こんな飛んでもない真似をした強ね者いたづら者さ加減は、我國に於ける空前絶後といふべきであるが、此男の忍術者であつたことは、我輩の紹介を待たず誰でも知つて居るのである。扱又、アレキサンダーにからかつた樽犬先生ダイオゼネスに至つては、自然に忍術の極致に達した點に於て、更に左慈以上五右衛門以上である。何も、忍術は強ねる術だの悪戯する術だのと矢鱈屁鱈に

牽強ける譯では無いが、徹底時代に反抗する強ね者いた
づら者が自己の特色を發揮する術として見るに至つて、
始めて大に振ふのである。

世の中が色と慾とに固まつて、榮耀榮華を極めやう美
人を自由に弄ばうとの争ひを主とすることは、戰國時代
と今と同じで、唯異なる所は、腕ッ節で野獸的に殴ち合
ふ代りに指先で算盤珠を弾き合ふと云ふだけである、随
つて現代の人材が財界にばかり偏して集まるも、已むを
得ない數と云はなければならぬ、他の方面には皆人材の
進路を妨げる障壁が設けられてあるのに、財界ばかりは、

丁度戰國時代に、
匹夫手に唾して起
つて風雲を叱咤す
るの快事が出來た
やうに、苟くも能
あれば空拳から鉅
萬の富を産するこ
ともむづかしくな
いのである、有爲
の徒の之に趨くは



かう云つたからして、我輩が其たつた一人で時代に反抗する強ね者いたづら者にならうとするのではない、我輩は唯だ強ね者いたづら者たるべき要素ある人に其なり方を傳授するだけである、我輩は寧ろ、左慈、五右衛門、ダイオセネスとならずして、曹操、秀吉、アレキサンダーとなりた方である、強ねる方悪戯する方ではなくつて強ねられる方悪戯される方になりたのである、同じ苗字の先輩に博文公と云ふ流行ツ子もあるぢやないか。そこで、忍術とはどんなものかとの問ひになる。

當然であらう、それに、財力さへ握つて居れば政界は苦もなく動かされるのであるから堪らない、一步を進めて云へば、戦國時代のそれが武門にばかり集まつたやうに、現代日本の人材は財界にばかり偏つて、政界は寧ろ其御餘りを頂戴し、學界文界に至つては、御餘りと迄も行かず、人間の屑や糟の棄場なる掃溜の用をなして居るに過ぎぬのである、情けないぢやないか。

戦國時代から腕ッ節を減いて色と慾とを残した上に算盤珠を加へた今の世の中は、強ね者いたづら者としての忍術者を出してもいゝ時代ではあるまいか、けれども、

◎忍術とはどんなものか

今の世に忍術の研究など、は馬鹿げて居るぢやないかの冷笑に對し、躍起となつて辯解し説明せんことを要する程、左様に我輩は或る一派の神経病患者連にかぶれはしない。

けれども、御嶽教の行者がやる火渡なるものゝ如き詰らない事でも、學者だの識者だのと云ふ傑い先生達が集まつて態々試して見るのに、世間は別にそれを不思議とも仕ないぢやないか、そこで我輩は唯一つ、忍術と云ふ

ものは、そんな火渡のやうなベテンの種類でもなければ、心靈の現象が辻つたとか轉んだとか云つて、湯の中で放つた尻を捉へやうと騒ぐ連中に、擔ぎ出ださるべきものとも、いさゝか性質がちがふと云ふことを、ちよつと斷つて置きたいのである。

そんなら、忍術とはどんなものか。さア愈此難問に對して兎に角辻褄の合ふ解答を與へなければならぬ羽目に、我と我身を押着けて了つた、今更逃げやうとて逃げられはしない、自分ながら物好きな男である、苦勞性の人間である。

なアに、石川五右衛門や鼠小僧の傳で、泥棒其他碌でもない事をする時人に知れないやうに忍び込んだり忍び出たりする方法が忍術さと、火移りのいゝ兄さんは直ぐ解答を與へる。成程、我輩としてそれは忍術でないと言は出来ない、けれども御氣の毒ながら、忍術の部類は忍術の部類でも、それは忍術の糟粕に過ぎないのである、忍術の垢に過ぎないのである、垢も垢爪の垢ぐらゐの所である、そんな事が忍術なら、今の泥棒や刑事の方が昔の忍術者より餘程進んだ研究をして居るであらう、今の泥棒や刑事を前に置いてそんな事を解説したら、寧ろ陳

腐だ幼稚だと云つて笑はれるであらう、我輩のこれから新研究を試みやうとする忍術は、そんな薄く浅い部分ではない。

再びそんならと云ふ、そんなら銀月の所謂忍術はどんなものか、忍術の傳書には、「忍術の忍と云ふ字は、忍び込むの忍ではなくつて、耐え忍ぶの忍である」と云ふ意味が説かれてある、一體傳書など、云ふものは、何の道に限らず、極くだらない牽強理窟を勿體らしく並べ立てゝあるか、左無くば、賣卜者の出鱈目に禪坊主の噺語を加味したやうな無意義の文字を行列さしてあるもので、

此「忍」の字の解釋も多少其臭氣を帶ぶるを免れないが、味つて見ると何時しか臭氣が忘れられるのである。

或意義に於ては、忍術は眞に忍耐する術である、極度の忍耐即ち忍術の極意である、而も、忍耐の他の一面は努力、一つの事を消極的に意義しては忍耐と云ひ、それを積極的に意義しては努力と云ふのであるから、忍術は極度に忍耐する術でさうして極度に努力する術である、忍術の一端は武術と結び着き、他の一端は禪と結び着いて居るが、本質としての忍術は武術でも禪でもなくつて唯だ忍術である、極度の忍耐と努力とを基礎とした一種

の心身鍛錬法である、こゝが忍術の堂奥である、昔は將軍でも諸侯でも厚祿を以て忍術者を抱え、加之苟くも武藝者と云はれる程の士で多少忍術の心得の無い者がなかつたも、豈偶然ならんやである。

そこで、我輩は此心身鍛錬法としての忍術を問題として、いさゝか新しい研究を試みやうと思ふ、なほ進んでは、火遁の術、蝦蟇の術、鼠の術等所謂妖術に属する範圍にも足跡を印けなければならぬ、是等も皆忍術の繩張内だからである。

◎忍術の堂奥に属する部分

忍術も其堂奥に入ると、一種の心身鍛錬法として見なければならぬものになると云ふことは、前に述べた通りである。

忍術の本義は、詰まり極度の忍耐と努力とを以て精神と身體とを過不及なく鍛錬し、機に臨み變に應ずるに備へるに在るのである、けれども、單に斯うばかり云つたでは空言たるを免れないから、これから段々言ふべく且つ行ふべき題目に入らうが、先づ吳々も讀者に吞込んで

置いて頂かなければならぬは、精神と身體とを過不及無く鍛錬するといふ點である。

何の道でも、皆精神が第一と云つて居る、けれども、いくら精神ばかりを鍛錬しても、身體の鍛錬がそれに伴はなければ、底が十分に固まるものではない、身體を磨り耗らしての精神の鍛錬は、鍛錬でなくつて打壊してある、御釋迦様でさへ、こんな遣り方の間違つて居ることを悟つて、女が呉れた牛乳で衰弱を補つたとあるではないか、精神ばかりを矢鱈に鍛錬しやうと掛ると、却つて神経が病的に過敏になるのである、さればと云つて、身

て認めらるべきものではないが、性質上是非それを過不及無く仕なければならぬので、自然に根本的修養に資すること多い結果となるのである。

で、愈々本題に入らうが、忍術には第一から第四迄の重なる練習がある、第一、「呼吸を整へる練習」、第二、「身軽く動き足疾く歩く練習」、第三、「變と難とを堪へ凌ぐ練習」、第四、「武藝柔術其他器械的練習」、是れである。

ちよつと考へると、第一から第四迄何れも身體の鍛鍊が主になつて居るやうであるが、實際精神の鍛鍊を一步も後れぬやうに伴はしめなければならぬ内容は、呼吸を

體ばかりを無暗に鍛鍊して精神のそれが御留守になると、相撲取や競技運動の選手に餘り伶俐な人間が無いと同じく、頭腦が少しぼんやりになる、どちらも妙ではない。

所が、何の蚊のと牽強理屈は云つても、眞誠に精神と身體との鍛鍊が過不及無く伴ふものは、忍術を措いて他に無いのである、他のは、何れを見ても、精神の方に偏らなければ、身體の側に傾くものばかりである、武藝柔術なども精神が第一だとは云つて居るが、嚴密に云へば實際身體の鍛鍊が主となつて居ることを蔽はれはしない、忍術は何も精神と身體との鍛鍊を相伴はしむる方法とし

50

である。

次には、第一から始めて實地に鍛錬の仕方を解説しや

整へる練習を第一に置いて、武藝柔術などの練習を第四に下げてあるによつても、略ぼ窺ひ知られるであらう、此呼吸を整へる練習と云ふは、文字通りに解釋すると何んでも無い事のやうであるけれども、忍術の玄妙は實に此一點に在るので、蝦蟇となり、鼠となり、木に化し石に化する等の神變不可思議も皆これから出るのである、豪傑となり、英雄となり、悟者となり、覺者となり、聖人となり、至人となり、仙となり、神となるも、皆此所に所謂呼吸を整へる練習の結果に在るので、精神と身體との鍛錬の積極的に相伴ふこと、之に過ぐるものはないの

◎呼吸を整へる練習

忍術の鍛錬の第一に置かれてある「呼吸を整へる練習」とは何であるか、曖昧な言語を用ひずに、まはりくどくなく解説すると、つまりどんな場合に臨んでも、呼吸をする音を人の耳へ入れぬやうにする練習である、否、他人の耳へ入れぬやうにするのでは不可い、自分の呼吸が自分の耳へも聞えないやうに練習するのである、他人の耳へ入らないやうにとの標準を取つては屹度他人の耳へ入る、自分の耳へも聞えないやうにと練習して、始め

て纔に他人の耳へ入れないことが出来るのである。

扱て、此呼吸を整へると云ふは、却々むつかしい事で

あつて、からだの具合が好く、氣血の循環が整ひ、飲食物と大小便との關係も至極順當な上、心には何の思ひ悩む事も案じ煩ふ事も迷ひ惑ふ事も怕ぢ恐れる事も悲み慟く事も無く、疾く歩いた後でも重い物を持つた後でも無く、湛然として靜坐すること良久しい時には、誰でも自分の耳へ聞こえない程に呼吸することが出来るが、毛一條落しても鉢に湛えた水は波を立てる、些かでも心を動かし身を動かすと直ぐ息が弾むのである、況して、非常

の變難に出つくはして、體が越の如くに躍り胸が鼓の如くに響く時にも、深く靜かに平生と變らぬ音のしない呼吸をすることを求めるは、大風の時に湖の波立たぬを望むと齊しく、てんで無理の注文らしく思はれる。

所が、練習の結果それが尋常に出來るから面白いのである、その出來るのが些も不思議でないのである。

昔は「臍下丹田に氣を鎮める」と稱して、武人と云はず文人と云はず少しく心ある者は皆一樣にそのやり方を練習したものである、これは精神と身體とを相俟つて凝定させる方法で、如何なる急變に襲はれ危難に臨んでも

胸轟き息迫ることが無いやうに鍛錬するのである、臍下丹田に氣を鎮めるとは、要するに或る形容に過ぎないので、今日の學語で云ふ腹式呼吸を強く深く極度にやり、身軀精神共に凝定不動の域に入るべく、如何なる場合に高低を生ぜぬやう呼吸の整一を練習するのが、即ち臍下丹田に氣を鎮めるの法である。

腹式呼吸とは、一口に云へば胸で息をせず腹で息をする事である、今少しく着實に云へば、空氣を吸ひ込む時胸を左右に張つて受けずに、腹を下部に張つて受けるのである、之を極度にやると、下ッ腹に咩と力を入れて

腰で答へ、深くく臍の下迄吸ひ込んで臍の下から吐き出す心持に呼吸をするやうになる、練習の仕始めは少々具合が悪く、氣を附けないと何時しか胸を左右に張る胸式呼吸に後戻りするが、十分に練熟して丁ふと自然にそれが出来るのである、但し、それは唯機械的に遣るのでなくつて、意識が常に呼吸に伴ひ、最低の部分を基礎として確かに之を踏み占めつゝ呼吸の出入を監督し、而も監督される呼吸は監督される壓力を覺えず、監督する意識は監督する苦勞を忘れるに至らなければならぬのである。

斯くて始めて、身軀精神共に凝定不動の域に入るので、驚いても恐れても心騒がず、動いても跳んでも息苦しくなく、心の騒ぎが傳はつて身を動かすに至らず、身の動きが感じて心を騒がすに至らず、如何なる變難に出つくはしても、呼吸をする音を人の耳に入れないやうになる、武者はよく不動心と云ふが、一面から見れば不動心他の一面から見れば不動身、二つの物一つで一つの物二つである。

豈獨り忍術の鍛錬の第一に置かるゝのみならんやである、こゝに所謂呼吸を整へる練習が十分に出来上つたら、地

球以外に飛び出て地球を自分へ引寄せることも亦左迄難くあるまゝ。

◎身軽く動き足疾く歩く練習

根本たる呼吸を整へる練習が出来上がつたら、今度は第二に属する「身軽く動き足疾く歩く練習」である。

これには種々の器械的練習が必要である、器械體操は御座れ、競技運動は御座れ、宙返り、蹴鈴立、足藝、球乗、何んでも蚊でも、取つて皆練習の資となすべしである、けれども、單に器械的練習ばかりではいけない、精神身體共に凝定不動の域に入るべく呼吸を整へる第一の練習を土臺とすれば、此、身軽く動き足疾く歩く第二の

練習は、土臺の上に柱立てをするのである、一舉手、一投足も土臺を離れて仕てはいけない、況して、毛程でも土臺に疵を附けるやうなことがあつては、却つて練習せぬに劣ること甚だしい結果となるのである。

若し十分に出来上がるなら、呼吸を整へる練習一つだけ、忍術は勿論、妖術でも魔術でも神仙術でも、何でも遣つて退けられるが、身軽く動き足疾く歩く練習だけでは、郵便配達か人力車夫ぐらの外に勤まる役目が無いのである、深く此第一と第二との關係に通曉しなければならぬ。

第二の練習には、先づ食物の選擇と筋肉の運動とで、痩せて締まつて強い身體を造るのが肝要である。ぶくく、肥りの豚のやうな體では、てんで物にならないのである、豚のやうなと云ふ程でなくとも、肥つて居る軀はどうも不合格である、斯う云ふと、銀月貴様も肥つてゐるぢやないかと一本參られるかも知れないが、我輩が今肥つて居るは、坐つて筆を拈くる時間が多いからである、其爲め一種の病に罹つて居るのである、筆の中毒とでも云ふべきであらう、けれども、何時でも筆さへ打棄つてびんく飛び廻つたら、直ぐ瘦るに極つて居るから、別段苦にも

しないのである、同じ筆の中毒でも、青くひよろしくして女の腐つたの見たいな料簡を持つてゐる奴よりはいい、だらうとは、些と負け惜みかも知れない。

や、これア横道へ反れて濟まなかつた、そこで此、食物の選擇と筋肉の運動とで、痩せて締つて強い身體を造ると云ふは、今の端艇や野球の選手が取つて居る方法と同じで、先づ食物は、油濃くなくて、人體に吸収さるべき養分を多量に含む肉類菜蔬を、適宜に調和して適度に胃の腑へ送り、さうして、あらゆる單獨運動、對抗運動、競技運動を、精力のあらん限り極度にやるのである。

所が、こゝで反對の議論に見舞はれさうである、過度運動は却つて體を壞す弊があり、競技運動の選手は頭腦がぼんやりになつて、他の事には役に立たないと云ふ實例のあるのをどうすると、突込まれさうである、けれども、それは無意義に運動ばかりするに就いての弊を云ふのであつて、明晰に云へば我輩の云ふ所とは問題がちがふ、吸収を整へる第一の練習を充分に遣つた上での運動は、いくら猛烈に試みても決して過度にならない、唯だ遣り盡くす極度があつて、遣り過ぎる過度はないのである、決して心配には及ばない。

詰まり、運動の爲めに運動をするのではない、第一の練習で呼吸を整へた効果を、實地忍術に應用する初步として之を爲すと共に、果して、充分に呼吸が整つたか否かを試験する方法として之を爲すのである、更に進んでは、此問題の底をたゝいて、「誰にも出来ない平凡の術」と、「誰でも出来る不思議の術」との研究に移らなければならぬ、それは次回に譲らう。

◎誰にも出来ない平凡の術◎

平凡の術なら誰でも出来て、不思議だから誰でも出来ないではないか、然るに、こゝにその反對の「誰にも出来ない平凡の術」と「誰でも出来る不思議の術」とがある、問題になるのである、先づ誰にも出来ない平凡の術から始めよう。

我輩嘗つて田舎の寺へ遊びに行つたことがある、すると丁度行脚僧が遣つて来て一飯を乞ふのに出つくはした、酒を出すと、好きと見えて非常に喜び、奇聲を發して種



々と面白い話を始め、果ては「愚僧の隠し藝を御目に掛けやう」と云ふ儘に、草鞋を脱いで本堂へ上がり、須彌壇前の太い圓柱をば、七八間ばかり離れた位置から、仁王立になつて、ぐつと睨み詰めて居たが、聴て、「え、ッ」と腹の底から響き出るやうな強く重い掛聲をすると、疾風の如くに駆け出したので、あはや圓柱に打突かるかと見て居ると、こは如何に、四十五度ぐらゐの角度に體を保つて、垂直に立つて居る柱へ、手離しでどんくくと昇り始めるのである、其足の運びの細かく早いこと、下から上へ近づて行くかとも見える「あれく」と一同

網れて目口を開いて居る間に、早や長い圓柱を昇り切つて、身を倒様にどんと格天井の縁へ兩足の裏面を打突け、それを力に宙返りを打つて、軽々と畳の上に降り立ち、からりと高く晒ふのである、人間業は愚か、猿だつて豹だつてこんな真似は出来やしない、これは現實を見たのでなくつて、催眠術に掛つて不思議の幻影を見せられたのであるまいかと、我と我が目を疑ふ程であつた。

そこで、其行脚僧に就いて、どうしてそんな不思議の術が出来ると訊ねた所、何も不思議な事は無い、満足な心と満足な體とを備へた人間なら、誰でも鍛錬すると

これが出来るやうになると、事も無げである、不思議の術ではなくつて平凡の術であると云ふ、けれども、我輩はまだ腑に落ちなかつたので、どうして鍛錬すると重ねて問へば、「忍術者にもこれの出来る者があるそうだが、愚僧の方は禪から鍛錬したのだ」と答へる。

行脚僧の説明に我輩の解釋と推測とを加へた結果は下の如くである、これは先づ、第一の「呼吸を整へる練習」と第二の「身軽く動き足疾く歩く練習」とを極度迄やつて、積極的に一致せしめ、其結果を實地に應用するので、此術を行ふに臨んでは、右の二法に依つて十分に鍛錬し

た結果の心身を提げて、下ッ腹に陣と力を入れつゝ、強く深く出来得る限りに息を吸ひ込み、手足の先迄息が充滿ちたかと思はれる程に、四肢五體の緊張するを待つ、さうしてから、吸ひ込んだ息をば微塵も漏らさずに、護謨毬を火に炙つたやうに張り切る體の彈力に、燃え立つやうな心の活氣を注いで、風を捲きつゝ、駆け出した勢ひの、遏めやうとしても遏めることの出来ない習慣性を利用し、些とも疑議せず一氣に柱へ駆け昇るのである、それが若し、呼吸を整へる練習がまだ十分の域に達して居ない爲めに、途中で苦しくなつて息を吐き出したら、そ

れッきり駄目である、又、呼吸だけは整つて居ても、身軽く動き足疾く歩く練習が十分の域に達して居ないと、壊れ易い容器に重い物を入れて振り廻すやうに、體が續かなかつて中途から轉がり落る虞れがある、柱の頂上迄一氣に遣り通し、倒まに天井を蹴つて引ッくりかへる段に登るは、もう練習すべき餘地を贏さなくなつた上の事である、即ち、鍛鍊して極度に至つた結果である、尤も、人間の息には限りがあるものであるから、二三丈の高さ以上には此法も利かない。

右の如く解説して來ると、手離して柱へ駆け昇るは、

不思議の事のやうで其實何の不思議もない、或る練習さへ積むと當然出来なければならぬ事なのである、不思議の事ではなくつて平凡の事なのである、けれども、其平凡の事が自在に出来る迄に、心身の鍛錬をやり抜く者が無いから、不思議の事として傳へられる結果になるのである。

誰にも出来ない平凡の術と云つた意味、讀者の會得せらるゝ所となつたことを信ずる、忍術に於ける第一と第二との練習を極度に一致せしめた結果は、どんな驚歎すべき技術でも出来る、以上の如きは、唯だ其卑近なる一

例に過ぎぬのである。

◎ 誰でも出来る不思議の術

「誰にも出来ない平凡の術」を説き了ったから、今度は「誰でも出来る不思議の術」に移らう、忍術に於ける第二の練習も、此に至れば全然着實のものとなるのである。これは、「身軽く動き足疾く歩む練習」の中「足疾く歩む」の方に属し、日の中に少くとも三十里を歩んで、左迄疲れを覚えぬ術である、日の中に三十里を歩んで疲れを覚えぬとは、如何にも不思議の術のやうであるが、肯てこれに特別の秘密がある譯ではない、無理がなく考へ

た結果を、實地に應用して練習するので、極く容易く誰にでも出来るのである。

そんなら、どうして練習したらいいかと云ふに、口で云ふより實際やつて見せた方が早判りであるが、紙上で歩いて見せることは出来ないから、一つ諄々と説明を試みやう。

先づ普通の歩き方は、正面を切つて代るゝ足を前へ出すのであるが此疾歩きの法は、進むべき前方に體の横を向け、股を開いて蟹のやうに横歩きをするので、詰まり、縦に歩く代りに横に歩くと云ふだけの事であるが、

横に股を開くのは縦のそれよりは自然で、苦しまずに間を廣くすることが出来る、演劇の助六が侍共に股を潜らせるにも、縦に開かず横に開くではないか、そこで、足と足との中間の延長に正比例をなして、進行する道路の距離が縮められるのであるから、縦に股を開いて歩くに比べて、足數の割に路の抄るは當然の事である、別段傳授も練習も要らず、誰でも出来る業であるから、諸君早速遣つて見給へ、横歩きの二歩は普通の三步に匹敵すること確かである、二歩と三步とは僅かに一步の差に過ぎぬが、二十歩と三十歩とは十歩の差を生じ、二百歩と

三百歩とになると、實に百歩の差を來すのである。但し此横歩きは、最初股を開く時には差支がないが次に、今迄後方に置いた足を前方に進める時、即ち股が交叉になる時には、どうも具合が好くないものである、けれども、それも慣れると何でもなくなる、越後



活に磨り抜けられもする、忍術としては最も此點に重きを置くのである、けれども、一般から見れば、此横歩きは早道の法として採用すべきものである。遣つた結果を見れば不思議の術のやうであるが、遣り方を聞けば少しも不思議でない、不思議の極は平凡で平凡の極は不思議、「誰にも出来ない平凡の術」と「誰でも出来る不思議の術」と、歸する所は一つである、勿論、此横歩きも、柱に驅け昇る術と同じく、呼吸を整へる鍛練を土臺としなければならぬので、そうでなければ長く續くものでない。

の奇人谷村釣雪子などは、此横歩きの遣り方が實に旨い加之、横歩きに慣れるに連れて足が草臥れなくなる、なほ、普通では、歩きながら物を食つたり小便をしたりするに勝手が悪いけれども、横歩きはそれも都合よく出来る、それやこれやで、日の長い時分には、夜明から日暮迄に三十里歩けると云ふのは、決して法螺でないのである。

それから、横歩きは以上の外忍術を實地に行ふに就いて非常の効を現はす、塀や壁や紙門へびつたり體を附けて、人目を避けつゝ進退する便宜もあれば、狭い所を敏

兎に角、以上數回述べ來つた所に依つて、忍術の練習の第一第二に屬する内容、及び第一と第二との關係が讀者の會得する所となつたことを信ずる。

◎變と難とを堪へ凌ぐ練習

第一の「呼吸を整へる練習」はすべての土臺であつて、第二第三第四は土臺の上に建築するのである、故に、第一から第四迄皆密接の關係がありながら、第二第三第四の間は別々に取離すことが出来るが、第二も第三も第四も、共に第一と取離しては物の役に立たなくなるのである。

そこで、今度は愈々第三の「變と難とを堪へ凌ぐ練習」であるが、これも、呼吸を整へる第一の練習が出来た上

にも、其爲めに弱つて役に立たなくなることとを免られられるのである、なほ、之に附屬した心得としては、今で云ふとグリコナールや何かなど、極少量で飢を凌ぐことの出来る食物の用意が必要である、忍術では、實地に有効であるから、此絶食の練習に頗る重きを置いてある、探検者、冒険家、其他苟くも大事を成さうとする人間は此練習を等閑に附することが出来まい。

それから、「睡らずに疲れぬ法」も、矢張練習の仕方と同じ方式に依るので、土臺が出来た上に、時々一日乃至二日三日の間睡らずに居る習慣を養ふのである、さうし

の問題な事は勿論で、此問題の内には、「食はずに飢えぬ法」「睡らずに疲れぬ法」「水火を凌ぐ法」「身體の損害に堪へる法」等を含むのである。

「食はずに飢えぬ法」はどうするかと云ふに、呼吸が十分に整つて、精力が溢れるばかりに充ち満ち、精神にも身體にも彈力が張切つて、靜なる時は驚かず懼れざるこ

と水の淵に湛えたるが如く、動く時は撓まず沮まざるこ

と風の野を捲くに似たるを得るに至つた上で、時々一日乃至二日三日の間絶食するの習慣を養ふ、さうすると、急變に襲はれ危難に遭つて、食を取ることの出来ない時

て、此習慣を養ひ得て、左迄苦しまずに遣れるやうに練習した結果の効力は、絶食のそれと異らないのである。今度は「水火を凌ぐ練習」であるが、これは、水に於ては水泳者の練習、火に於ては江戸以來の名物たる火消人足の練習、此二つの外に出でないと云ふよりは、寧ろ出でることが出来ないものである、苟くも海國男兒たる日本人に水練の出来ない者は無い筈であるから、水練の點に就いては多くを云はぬが、火を凌ぐ練習に就いては一言を費さなければならぬ、勿論、火を凌ぐと云つた所で生身を以て猛火の炎々たる中を通り抜けられる譯ではな

く、火焰の下、煙塵の裡、普通の人間の企て得ない所を潜り抜けるだけの練習なのである、此點に於ての火消人足の練習は、我慢第一、習慣第二、器具第三であるが、忍術に於ては、器具に依られない場合を標準として練習するので、矢張呼吸を整へる練習を第一とし、我慢は第二に居り、習慣を第三とするのである。最後に、「身體の損害に堪へる法」であるが、これは、急變に襲はれ危難に遭うて、強く物に打たれるとか、不意に高い所から落ちるとか、手足を折るとか、負傷するとかの場合に處する法である。而も、これとて別に不思

議の法があるのではなく、呼吸を整へる練習の十分に出
 來上つたのを土臺とし、精力と彈力とを極度に振ひ起し
 て、身體の損害に打勝ち、以て其損害から來る痛苦に堪
 えるのである、但し、我が輩が前に述べた「呼吸を整へ
 る練習」を十分に遣りさへすれば、屹度これの出来るこ
 とは受合である。

以上すべて此題目中の練習は、獨り忍術者のみならず、
 何人も之れを行ふべきものなること勿論である。

◎武藝柔術其他器械的練習

忍術の鍛鍊に於ける第四階級に屬する「武藝柔術其他
 器械的練習」を説くのだとはなつた、武藝柔術の根本に
 なる「呼吸を整へる練習」即ち氣を丹田に鎮める練習に
 就いては、既に反覆して述べ盡くしたのであるから、云
 ふ迄も無くそれが出來た上の事として述べるのである。

忍術に於ては、武藝柔術の練習に最も重きを置かなけ
 ればならぬ、武藝柔術の練習の伴はない忍術は、裸體で
 道中をすると同じである、けれども、第一の「呼吸を整

へる練習」を土臺として、第二第三の練習を之に加へつゝ、極度に至つた結果は、身體精神相俟つて靈妙の働きを爲し得ること、武藝柔術の奥儀を窮めたと同じ度に至るのである、此上は唯だ武藝柔術の形式即ち「カタ」を覺えるだけでいゝのである、だから、武藝柔術の練習を第四に置くのは、決して武藝柔術に重きを置かない爲めでないのである。

武藝柔術以下の器械的練習及枝葉の方法に至つては、忍術の傳書に説いてない、忍術の傳書には、前にも述べた通り、賣卜者の出鱈目に禪坊主の戯語を加味したやう

な無意義の文字を行列としてあるので、「睫毛に止りて目を逃れよ」「燈臺の下に萬兵を伏すべし」など云ふ謎見たいなことを多く書いてあり、實際に應用すべき些少な手段方法などは一も説いてないのである、詰まり、これ等は實地に就いて師匠から弟子へ直傳するので、傳書へ管々しく書くの必要もなければ、亦書くの煩はしさに堪えぬから省略されたのであらう。

それに、前にも述べた通り、實際の手段方法に至つては、昔の忍術者よりも今の泥棒や刑事の方の研究が餘程進んで居るにちがひないから眞面目腐つて陳腐な事を云

ふも馬鹿々々しからう、加之、我輩は忍術の堂奥に属する部分だけを、即ち心身鍛錬法としての忍術を研究するので、忍び込む術や忍び出る術や身を隠す術としての忍術を研究するのではないから、此方面の事はいゝ加減にして止さう。

けれども、實際の手段方法も、たゞ其どんなものであるかを知らしむべき度に於て一斑を示すだけはよからう、而もこれは、後に至つて妖術の研究をする材料になるのであるから、讀者諸君其積りで記憶して呉れ給へ、そこで、これをも二つに分類しなければならぬ、第一、「身體

の結束を物理的法則に一致せしむる事」第二、「身體の動作を物理的法則に一致せしむる事」、これである。

第一には、先づ着物で云へば、絹では歩くと音がするから柔かい木綿が好く、純然たる黒色は却つて暗夜に目立つものであるから、黒に赤みを加へた色に染めなければならぬと云ふ事を始めとし、手拭



迄も普通と異つて蘇枋染にする、これも黒みを含んだ赤色であるから、煩冠をすると夜の色に紛れて頭が見えなくなる利があるのである、又手拭の寸法を普通より長くするは、成るべく餘計の物を持たずに身を軽くする必要上、手拭に種々の用を兼帶させるからである、それから忍術者の持つ刀、これにも寸法がある、塀を越える時に立て掛けて足場にする爲めや、物と物との間の距離を度る時の爲めに、柄頭から鞘尻迄の寸法を定める必要あり、刀の長さも、狭い所で働かれるだけの寸法にしなければならぬ、下緒に至る迄も、普通に随つて襷に用ふるの外

塀を越える時、下に立てゝある刀に附いた儘其端を口に啣へて、身體が塀の上にあがると共に引き上げられるやうに、寸法を特別にして置くのである、其外草鞋は麻で作つたのを濕して穿くとか、一々記さないが種々細かい事があるのである。

次に第二にも、暗夜に燈火を避けつゝ、或る場所に忍込むに、燈火の位置と之に依つて物を見やうとする人の位置をも考へて、自分の取つて進むべき部分を選び、體を横にするか斜にするか平つたくするかかの角度を定め、それを寸分の相違なく物理的法則に一致せしめる事から、

人に見附からうとする時、石に寄り木に寄り若しくは大地に倚つて體を隠す事など、其他種々あるのであるが、まア大抵にして置かう。

◎日常生活に應用すべき忍術と

催眠術との關係

固より十分とは云へないが、第一から第四迄略解説した所に依つて、忍術なるもの、概念を讀者に傳へ得たことを信する、且つ、主として心身鍛鍊法としての忍術を問題としたことも、亦讀者の會得する所となつたことを信する。

そこで、我輩は更に一步を進めて、心身鍛鍊法としての忍術を日常生活に應用することを、諸君に勧めやうと

思ふ、これを爲すことに依つて得る所の利は、第一、呼吸を整へて精神と身體との調子を一致せしめ、事に應じて宜しきに叶ふの働さを爲し得る事、第二、身體強健で彈力に富み、起居進退機警に輕捷なるを得る事、第三、變に堪へ難を凌ぐの素地を作り得る事等、詰まり、爲し得るの器、用ふるに足るの材を造るに在るのである、今の世、口の先か筆の先の達者な小才の走つた人間は、桮で量る程あるが、此第一から第三迄の鍛鍊を十分に遣り抜く者は少いのである。

こゝで、忍術と云ふものは矢張催眠術のやうなもので

あるか、催眠術の一種ではないかと云ふやうな、質問を受けなければならぬ、これは、今の世に於て當然の推測である、此質問に對しては明白の解答を與へなければならぬ、さうでなければ、忍術の曖昧なものと認められるであらう。

明白に答へて云はう、催眠術の一種でも無く、催眠術のやうなものでもなく、忍術は唯だ忍術で、全く獨立した別種のものであると、呼吸を整へる練習、身軽く動き足疾く歩く練習、變と難とを堪へ凌ぐ練習、武藝柔術其他器械的練習等を極度に遣つた結果、結束と動作とを物

理的な法則に一致せしめて起居進退するのが、即ち忍術である、底をたれば、何の奇も妙も無いのである、物理的法則以上に、人を眠らしたり、人の目を晦ましたり、指を變な具合にして印を結んだりする、法術は無いのである、尤も今の所謂催眠術と同じ性質の術を應用したと云ふだけであつて、語を換へて云へば、忍術に催眠術を加へたと云ふだけであつて、忍術即ち催眠術、催眠術即ち忍術と云ふわけではない、催眠術を加味しやうがしまいが、忍術其物には些かの増減もないのである、昔の忍術者は、催眠術や白狐使ひの飯綱の術を加味したものを

妖術の新研究

◎妖術とはどんなものか

妖術とはどんなものか、此問ひに答へることは、忍術とはどんなものかとの問ひに答へるより、更に困難である。

先づ、妖術と云へば、印を結んで咒文を唱へると、そこに立つて居た人間が、見る間に煙のやうに消えて無くなるとか、陸地を大海に化すとか、平野に高峯を湧かすとか、白晝を暗夜にするとか、晴天に風雲を起すとか

空を飛ぶとか、水の上を這つて歩くとか、蝦蟇、蛇、蛭、蟬、蝴蝶等に變化するとかして、自在に其爲さんとする所を爲し得る術のやうに思はれる、けれども、そんな咒文一つで出来る妖術は、實際有り得るものであるかどうか、頗る怪しいものである、又、實際有るものとしても、それは我輩の知らざる所で、且つ知るを欲せざる所である。

たゞ我輩は、心身鍛錬法としての忍術を極度に練習した結果としては印も結ばず咒文も唱へずに、自然に、蝦蟇に化し、蛇に化し、蛭蟬に化し、蜘蛛に化し、蝴蝶に

化し、空を飛び、水の上を這り、白晝を暗夜にし、晴天に風雨を起し、陸地を大海に化し、平野に高峰を湧かすことが出来ると聞く、又出来ると思ふ、否、出来なければならぬと思ふ、そこで、これから其理由を研究し、其方法を練習しやうとするのである。



美ちりん

雨

而も、これには、毫も催眠術らしい臭氣を帯ばず、何所迄も有形の事實を追掛けて、追つ着いた所を足場とするのである、だから、或意味を以て云へば、蝦蟇の術も鼠の術も、蜘蛛の術も、蝴蝶の術も、案外平凡なものである、案外單純なものである、けれども、其平凡は單位の平凡でなくつて、奇抜を通り越した上の平凡なのである、其單純も單位の單純ではなくつて、複雑を通り越した上の單純なのである。

そこで、愈々妖術の研究である。

仁木彈正が鼠に化けて巻物を盗む、兒雷也が蝦蟇の術を行つて好き放題の真似をする、大蛇丸が蟒蛇に乗つて飛び廻れば、綱手も蛞蝓の大きな奴の背中に立つて、威張る、すると、大友若菜姪と云ふ御轉婆が負けぬ氣になつて蜘蛛を使ふ、藤波由縁之亟と云ふ若衆も躍起となつて蝴蝶となることを考へ出す、畢竟皆小説的空想中の産物に過ぎないのであるが、いくら空想でも、全く根も葉も無いことを事實として組立てられはしない、我輩の研究によれば、忍術を十分に練習した結果として、是等の妖術も正當に行ひ得るのである。

◎鼠となる術

仁木彈正は三好屋の專賣、荒獅子男之助は成田屋物、榮御前が迂濶に政岡へ渡した一味徒黨の連判狀、それを取戻さうと、鼠に化けて御殿へ忍び込み、旨々と口に啣へて飛び出す床下、佞人ばらの讒言にて御目通りを遠ざけられながら、斯る事もやあらんかと頑張つて居たのに出つくはしたが最後、「うぬアたいの鼠ぢやあんめえ」と云ふ儘に、男之助の鐵扇が大鼠の眉間に下る、立廻りになつてどろろと消えると、スッポンからニユーと現は



れるは、濛朧たる鼠色の杜打で口には確と巻物を啣へ眉間の疵に凄みを添へられた仁木である、「取逃したか残念」と男之助に口惜がらして、せゝら笑ひながら悠々と引込む沈着振、成程忍術の極意を得たものと思はれる。

又、「折しも庭の草隠れ、

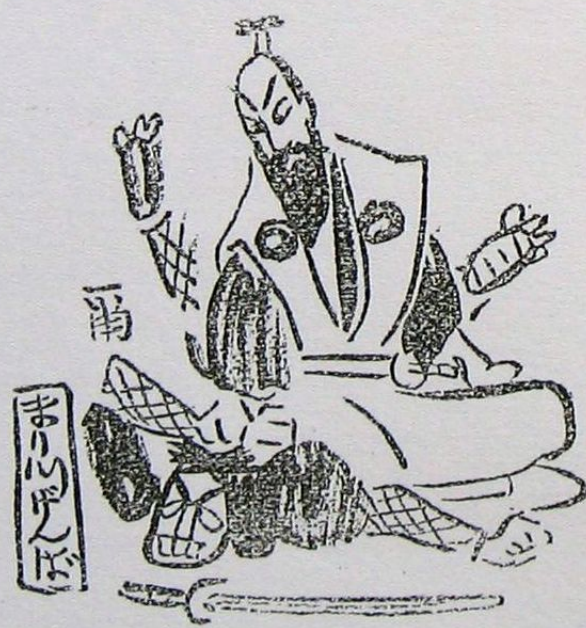
現れ出でたる數多の鼠ねずみと、床の太夫が締殺されるやうな聲を振り搾れば、矢張り男之助にぶんなぐられたそれのやうな大鼠おほねずみが、何匹となく二重に飛び上る、それ等をばらくと礫ついでに打つて、其中の大將を膝下に組み敷き、「汝は時政の身内に於て、忍びに名を得し鞠川まりがわよな、首引き抜くは安けれど、」とか何とか嗚鳴るのは、八陣守護本城の正清、引饜ひつがんで抛り出すと、鼠になつて消え失せるは鞠川まりがわ玄蕃である。

演劇や小説では、眞誠に鼠になつたことにしなければ面白くないから、それを事實としたのであらうが、其實

これは形容詞に過ぎぬのである、讃歎を加へた形容詞な

のである、人間が鼠に化けるのだからと云つて、繪に描くにも、形に表すにも、文字で意味するにも、人間の程の大きさの鼠とする所に、實際の消息が傳へられて居るのである。

呼吸を整へる第一の練習を十分に遣り抜いたのを土臺として、身軽く動き足疾く



歩む第二の練習を極度に遣つた結果は、人間も實際鼠となつて行動することが出来るのである、驅けること電の如く、柱に昇り、長押を渡り、狭い所を磨り抜けること何の苦もなく自由自在に出来るやうになり、其速きこと目にも止まらぬ程であつたら、之を形容して鼠と云ふも差支無いのみならず、實際瞥と見た者の目に鼠と映ずるであらう、「何だらう、鼠かも知れない」と云ふ怪訝の果は、「どうも鼠より外の物とは思はれない」と云ふ推測に移り、其推測も「鼠だらう」に進んで「鼠にちがひない」と迄に煎じ詰められなければならぬ。

かの、手離しで柱へ駆け昇る行脚僧の技などは、鼠の如しと形容すべき程度以上、遙に高きものである、勿論或る時間に限られては居るが、其時間内に於ける行動の非凡さ加減は、却つて鼠も指を啣へて引込まなければならぬ程である。

而も、これは不思議の法でも何でもない。忍術の研究の中で述べた通り、呼吸を整へる事を始めとして、第一から第四迄の練習を十分に遣り、活氣と彈力とが身體にも精神にも光ち満ちた上で、之に極度の鞭撻を加へ督勵を與へると、必ず確に爲し得るのである、其順序方法は

忍術にんじゆつの部ぶで精くはしく説といてあるから、諸君しよくんに斟酌しんしやくを願ねがひた
し。

◎蝦蟇がまの術じゆつ (上)

支那しなに蝦蟇がま仙人せんじんと云ふものがある、兒雷じらい也やが蝦蟇がまの術じゆつも、此この仙人せんじんの部類ぶるいに屬ぞくする怪あやしの者ものに傳つたへられたのであらう、それは兎とに角かく、蝦蟇がまの術じゆつとはどんな性質せいしやうのものであるか、其術そのじゆつに於おけるの蝦蟇がまは、主觀しゅくわん的てきのものであるか、客觀きやくくわん的てきのものであるか、碎くだいて云へば、人間にんげんが直たちに蝦蟇がま其物そのものに化くするのであるか、若もしくば、人間にんげんは人間にんげんとして外部ぐわいぶから蝦蟇がまの力ちからを借かりるのであるかを、先まづ明あきらかにして掛からなければならぬ。

それには、更に先づ、一體蝦蟇と云ふものはどう云ふものであるかを知つて置かなければならぬのである、蝦蟇は蟄である、夏の夕方ノソリ／＼と檻の下から這ひ出して蚊を吸ふ所の、古怪にして頑強なる風采を有するものである、但し、蝦蟇仙人とか蝦蟇の術とか云ふ所の蝦蟇は、巨大なるそれを意味すること勿論である、こいつ確かに一の怪物で、人頭大のやつになると、犬ぐらい殺される程の棒で撲つても平気で、大抵の刀物では切つても切れない、就中此奴何かの靈妙な力でも有つて居るのであるまいかと思はれるは、それを平な土間に置いて、

米を搗く大臼を伏せ、更に其上に大石を載せ得る限り載せて、外から臼を引ッくりかへしてやらなければ、どうしても出られないやうにして置いて、一晚経つて翌朝に見ると、臼も石も元の儘で何の變動がないのに、肝腎の蝦蟇だけは、煙となつたか霧となつたか、掻き消す如く影も見えないのである、これは我輩の實驗した所であるから、確かなる事實と斷言し得られる。

詰まり蝦蟇の術と云ふのは、客觀的のものでなくツて主觀的のものなので、外部から蝦蟇の力を借りるではなく、掻き消す如く形を見えなくする點に於て、蝦蟇と同

じ働きをすることを意味するのである、それから、昔の毛唐人の噺語に、蟾蜍月を見て飛ぶとか云ふことがある、蟾蜍は「ひきがへる」即ち蝦蟇である、なほ一層進んでは、俗に人魂が飛ぶと云ふのも、ありア人魂でなくって蟾蜍が月を見て飛ぶのだなど、出鱈目の極を云つて居る、即ち、燐火の飛ぶのも蝦蟇が飛ぶと牽強けるのである、其實蝦蟇は寧ろ鈍いもので、小さい蛙の割にも飛べやアしない、蝦蟇月を呑むと云ふは、例の怪物的相格の奴が、三日月の宵にでも、空に口を向けつゝバクリ／＼やツて居るを見ての形容から來たものであらう、これら

の事から、無理に蝦蟇と月との間の關係を作つて、果ては蝦蟇と月とを混同し、月は蝦蟇の化けたのでいもあるやうに天蟾だの玉蟾だのと名附けるやうになつた、そこで、蝦蟇の術と云へば、形を見えなくすることの外、自在に飛行することを意味するやうであるが、飛行の方は蝦蟇其物に對しても架空の想像たるに過ぎぬと共に、小説化されたる蝦蟇の術なので、實際の蝦蟇の術は、己れ其所に在りながら、形を人の目に見えなくして、消え失せたやうに居なくなることである。

形を人の目に見えなくして、消え失せたやうに居なく

なるとは、如何にも神變不可思議で、印を結び咒文を唱へでもしなければ出来得べからざる事のやうであるが、それが正當に出来るから面白いのである。

◎蝦蟇の術蜘蛛の術其他(下)

そんなら、どうして、形を人の目に見えなくして、消え失せたやうに居なくなることが出来るかと云ふに、呼吸を整へる練習を極度に遣つて、膺下丹田に氣を鎮めることを得ると、十分に息を吸ひ込んで叫とこたへて居る時間内だけは、精神身體共に、静止不動の極、無機物と同じになることが出来るのである、既にこれが出来る以上、其人若し夜中庭石の間に身を潜めたら、全く庭石と同じ物になつて見えなければならぬ筈である、木立の中

に身を潜めたら、全く木立と同じ物になつて見えなければならぬ筈である、夜中庭石の間に身を潜めて人目に觸れぬを得る蝦蟇は、人間より一步を進めて此法を會得したものである。

實際精神身體を併せて無機物の如くに凝定せしむると云ふことは、一通りや二通りの鍛錬の結果に出來得る術では無く、感覺の非常に鋭敏な者には、どうしても温みと血の通ひとを感じ知られるを免れぬのである、けれども、鍛錬して其極に至ると、確かに、息を十分に吸ひ込んで下ッ腹に力を入れて居られる時間だけは、無機物と

異らぬ凝定の域に入ることが出来る、論より證據、諸君自ら試みて其妄ならざるを知り給へ。

豈獨り庭石の間のみならんやである、忍術者が何もない平面の大地の上でも、びたりと吸着いて俯向に突伏す時には、忽然消え失せて見えなくなると云ふが、此法から推すと何の不思議も無いのである、猶進んで、燈火の位置と人間の視線との關係の物理的法則に通じ、之れを避くべく節に合するの進退をなすことを得たなら、庭石や木立の間でなくとも、大地の上でなくとも、座敷の隅でも、廊下の端でも、どんな所でいも、消えて無くなるに

と身軽く動いて、此所にあるかと思へば忽ち彼所に在るが如くなり得る點から意味するので、其名の相違は唯だ意味する點の相違に過ぎぬのである、又、蜘蛛の術と云ふのも、理屈は別に變らないが、柱に駆け昇つたり、長は形容して鼠の術と云ひ、又或場合には蜘蛛の術と形容するのである、なほ、蜘蛛の術に在つて鼠の術に無い一



*押の上を
驅けて歩
いたりす
ることを
或場合に

手間がかゝらない、蝦蟇の術とは之に外ならぬのである、否、忍術に於ける蝦蟇の術とは之を云ふのである、この外に云ひ傳へられる蝦蟇の術は皆小説的空想の産物である、吸ひ込んだ息を保つ間、形を人の目に見えなくすることが出来るから、どんな變幻出沒でも逞しうされる筈である。

其他、蛇の術と云ひ蜘蛛の術と云ひ蝴蝶の術と云ふも、歸する所の點は皆同じで、一の根源から發するのである、蛇の術と云ふは、重に自由自在にどんな狭い所でも細い所も通過し得る點から意味し、蝴蝶の術と云ふは、翩々

つの技は、掌や胸や腹や腿や脚の肉の間に凹まして真空を造り、壁や羽目の中途へびたりと縦に吸ひ着いて、下へ落ちないことである、これは練習が至難な上に、第一體質に依るのであるから、古來爲し得る者が極めて少ない、我輩も、たつた一度僅かに三十秒時間ばかり保ち得た者を見ただけである。

次には火遁の術を研究しやう。

◎火遁の術

八犬士の一人犬山道節は火遁の術を能くしたとある、けれども、それは左道と云つて正當の道ではないから、犬士の群に入ると共に斷然術を使ふことを廢して、傳書を燬き棄てたとは、馬琴親仁の小説的構想で、眞實を云へば、火遁の術は意義明瞭な正當の道なのである。

姦雄曹操を翻弄した妖術使ひの左慈も、天遁地遁人遁三卷の天書を得てから、通力自在なるに至つたと暗いて居る、天遁とは、日に倚り、月に倚り、星に倚り、雲に

倚り、霧に倚り、風雨雷電に倚つて、跡を晦ますこと、
 地遁とは、山に倚り、川に倚り、水に倚り、木に倚り、
 草に倚り、石に倚り、砂に倚つて、跡を晦ますこと、詰
 まり、物に倚つて跡を晦ますことを「のがれる」と云ふ
 遁の字を以て意味したのである、而も、此遁の字の附く
 術は、皆印を結んだり咒文を唱へたりすると自然に出来
 るやうな、怪しいのではなく、正當な理詰めの結果なの
 である、就中最も行ひ易くて奏功の確實な火遁の術で
 ある。

火遁の術とは、不意に發した火を便りに姿を隠す事で

犬川莊助が道
 節へ切り附け
 ると、道節が
 閃然と身を躲
 す、切先餘つ
 て憂然と石へ
 切り込む、バ
 ツと火花が走
 る、すると其
 の火を便りに道



節は身を隠し
 た、これは八
 犬傳の筋であ
 るが、實際確
 かに出来るこ
 となのである、
 實際は、火さ
 へ得れば其刺
 戟に依つて靈
 妙不可思議の

術が出来ると云ふやうな神秘的意味ではなく、不意に發した火に依つて、自分を凝視する若しくは追窮する人の視線を之に轉せしめ、一瞬間に非常なる敏速の動作を以て、其人の視線の及び得る範圍以外に身を脱するのである。

で、此實際の火遁の術は、不意に發した火を利用することもあるが、それは特別の場合なので、自分を凝視する若しくは追窮する人の視線を他に轉せしむべく、先方の不意に出で、思ひも寄らぬ方面に突然自分の手で火を出すのが尋常である、自分の前でも、横でも、身を退

かうとする反對の方面でも、其場合の宜しきに随つて、燐寸でも何でもいゝから、手早く火を點す、出し抜けであるから、先方の視線は一時之に引かれる、其間に素早く身を脱するのである。

木に倚つて遁れるも、草に倚るも、石に倚るも、雲に倚るも、霧に倚るも、風雨雷電に倚るも、皆一時物を藉りて他の眼を之に集めさせるので、理屈は同じである、秀吉峰須賀小六に随つて居る時分、首領を始め十餘人の者と一緒に或る豪家へ泥棒に入つたが、引上げの際たつた一個出後れて大勢の家人に引捕へられやうとした、此

れらは自然に「遁」の字の附く法術の堂奥に入つたもので、此法術は甚だ廣い範圍に應用することが出来るのである。

妖術の研究は、これで終りとする。

時十五にも足らぬ小僧の秀吉は、早速の機智、有り合ふ可なり大きな石を抱え上げて、井戸に臨み呀と聲を放ちつゝ、淘言と投り込み、其儘一方へ身を退いた、果して、「それ泥棒が井戸へ落ちた」と、たい井戸を指して人々が集まつて来る、其間に秀吉は安々と逃げ出ることを得たのである、又、約束して小六の刀を盗みに入る時にも、軒の雨垂の下に笠を置き、小六に其方を警戒させて朝迄睡らせず、曉方になつて、笠を打つ雨垂の音を聞きながらトロ／＼とまどろむ隙を見済まし、雨垂を反対の方角の家内の方から恐び込んで、旨々と刀を盗み取つた、こ

忍術の實地試験

◎銀月自ら忍術者の實習を見る

忍術及び忍術の或る部分の別名なる妖術に就いては、既に其大要を述べ得た積りである、且つ、其門に入り堂に昇るの道をも、讀者が會得せられるやうに説き示した積りである、これに依つて十分の練習を積んだら、精神及び身體に欠點の無い者は、誰でも其奥に達しられる筈である。

けれども、手離しで柱へ駆け昇る坊主の事の外は、殆

んど皆其理のみを説いて其實を示さなかつた、そこで、此一回は、自分が嘗て忍術者の實習を見た時の記事を以て充たそうと思ふ。

數年前、我輩と同臭味の強ね者氣紛れ者及び奇を好む徒が七八人、或家に會した事があつた、落花の時節で、雨の降り頻る夜であつた、餘り明るくない臺ランプを圍んで、各々珍奇の話題を拈り出し、夜の更くるを覺えなかつたが、其中一人が其連れて來た或者を指し、「此男は忍術を研究して居る」と云ひ出した、場合も場合、集つた人間も人間であるから、一同之を聞いて、打興するこ

と一通りでない、「矢張り魔法と云ふ類のものか」の「催眠術を應用するものか」の切支丹パレンの法と云ふもの
とちがふか」のと、種々の質問が出た上、「何でも無いものだから此所で遣つて見せやうか」と云ふ、「そりア面白い、遣つて見せて呉れ」と一同が乗り氣になると、其男は物をも云はず立ち上がりさまた突然フツとランプを吹き消した。

そこで、一同大騒ぎとなり「これア非道ひ」と憤る者もあれば、「ランプを消して身を隠すのなら、忍術に依らなくつても出来る」と嘲る者もある、それでも、件の忍

術者は聲もしないから、馬鹿々々しい、ランプを點けやうぢやアないか」と一人が燐寸を摺つた、パツと明るくなる、すると、忍術者の床の間に突伏して居るのが見え、た、「これア大笑だ、忍術と云ふものはそんな詰らないものか」と一同大笑ひになる。

此時、一同の笑ひ聲を壓して、一種傲慢なやうな強く大なる笑ひ聲が一座の中に起つた、恠りして見ると、豈測らんや、忍術者は車座の中に雜つて、巻煙草を吹かし乍ら平氣で胡座を掻いて居るのである、これア不思議だ一個の人が二個になつた」と怪み訝るべき所だが、實際

人間はそんなに迂闊なものではない、之を見ると共に、床の間の上のは、其忍術者が今迄着て居た羽織を脱いで、陶器の唐獅子に打ち着せたものと判つた、忍術者得意然として曰くさ、「忍術と云ふものはこんな詰らないものさ、だけど、床の間の羽織に諸君の目が附いたか附かぬかに僕が此断に居て大聲に笑つた一瞬間は、諸君にも案外に感じられたらう。詰り此瞬間を把握するのが忍術の本義で、此瞬間の把握の應用し方に依つては、世界を引つくりかへすことも出来るだらう」と。

我輩が忍術の研究に興味を感じた動機はこれである、

「睫に止まつて目を逃れよ」の、「燈臺の下に萬兵を伏すべし」のと云ふ忍術の格言を聞いて、非常に面白いと思つたのも、此時である、これは、誰でも容易く出来る事のやうで、實際なか／＼さうではない、第一、立上つてランプを吹き消した時には、まだ羽織を脱ぎさうな氣色を見せてはならないのであるから、次の一瞬間には極めて手早く脱いで、豫て目を附けて置いた床の間の唐獅子へ、手際よく、裾が手前になるやう、フハリと投げ掛け、人々が突然ランプを吹き消されて、憤るやら嘲るやらの大騒ぎが収まらぬ間に、蚤くも前の己れの席と異なる位置

を取つて割り込みつゝ煙草を吹かし、誰かい燐寸を摺つて、人々の視線が床の間に注ぐ一瞬間に投すべし、下ッ腹に力を入れて吸ひ込んだ息を漏らさず、温み無く血の通ひ無き無機物と同じくなつて待構へなければならぬのである、此に於て、忍術に於ける第一から第四迄の練習は、こんな何でも無いやうな事にも土臺となつて居ることが判るであらう。

忍術妖術と仙術

◎忍術者が心身鍛錬法の或一面

忍術妖術に就いての研究も、前回で結末にする積りであつたが、今一つ興味ある題目を遺したから、是一回だけ追加さして戴かう。

忍術者が心身鍛錬法として行ふ事の中に、「仙家傳來の術」と稱するものがある、それには二法あつて、一は「飛行身を作る法」、他の一は「氣血を純清ならしむる法」である。「飛行身を作る法」とは、敢て鳥類のやうに自在に

空中を飛翔する事を意味するのではない、實際又、飛行器の發明が完全の域に達する迄は、人間として肉身だけで鳥類の眞似が出来るものではなく、これは唯だ、一丈二丈の潤を飛び越したり、普通人に出来ない高い所へ飛び上つたり、高い所から飛び降りたりすることを、誇大に形容して斯く云ふのである、そこで、飛行身を作る法とは、今の競技運動に所謂「高飛」「幅飛び」などを極度に遣り得るやうに、身體を鍛錬する法と云ふ意味なので、これには、仙家に於て種々の修行があり、脂肪分少なくて體に力を附ける食物を取る事から、一種の深呼吸法

其他數へ立てると澤山あるが、就中第一に置かれるは、凡胎を脱すると云つて、體の水分と脂肪分とを抜き取る事である、其法は重裘即ち重い皮衣を着て、山谷の間を無茶苦茶に馳せ廻るので、斯くすると、餘計な水分と脂肪分とは汗となつて排出せられ、皮衣に吸ひ取られ、體が締つて強くなるのである、凡胎即ち安樂に暮らして來た身體には、必要以上の水分脂肪分が貯へられてあるので、激しい運動をすると、それらが燃焼作用を起して水蒸氣及炭酸瓦斯となり、之が爲めに苦痛を感じしめ、息切れを起さしむることは、今の科學の教ふる所ではな

々々頭脳に満ち渡り、頭から頸に降り、頸から胴に及ぼし、胴から脚に及ぼして降るに随ひ、凡血を下に逃げさせ終には體中盡く天の泉を以て満たし、凡血の滯留すべき餘地が無くなつて沸々焉と十本の足の指先から外へ出る、此想像を幾度となく繰り返すと、最後には血色純明神氣清爽朗として、玉山夜行くが如き段に入ることが出来る、と説かれてある、具體的に云へば心身共に無病健全で、明確に考へ活潑に動くことが出来る、と云ふのである、なか／＼面白いではないか。

忍術者が、以上の所謂仙家の二法を心身鍛錬に應用す

いか、して見ると、古への仙家の着眼點は傑いものと云はなければならぬ。

「氣血を純清ならしむる法」は飛行身のやうな平凡の事ではなく、これは些と變つて居る、今の所謂精神療養の部類に屬するものであらう、此法を修するには、先づ裕やかに胡坐を掻いて無念無想の境に入り、それから、自分の頭脳の眞上に當る天界から極めて清く冷かな泉が降り始めた、と假定する、想像の力を何處迄も發揮してそれを事實と思ひ込むに至る、そうして、それが段々と降つて頭面に及ぶ、黒く粘つた凡血を驅逐して、其天の泉が段々

るとは、頗る旨く考へた事である、一つは生理的で他の一つは心理的、生理的と心理的と相俟つて鍛錬に資するとは、拔目の無い態度である。

昆野睦武氏に與ふる書

昆野睦武氏に與ふる書

昆野君足下、僕未だ足下と相識らずと雖も、幸ひにして足下の或一面を熟知するの機會を得たり、爾り、或一面に過ぎずと雖も、恐らくは是れ足下の全部を發揮して示したる或一面なりしなるべし、故に、僕は足下を見たりと云はんことを希ふ、更に進んで、足下を知りたりと云はしめられんことを望む、而も今は最近五月十四日の夜也。

僕は、柔道家としての足下と拳闘家としての米國水兵

との試合を見たり、入場料の日本に於ける他の興行物に比較して餘りに不廉なると、外字新聞に廣告せざりしとの故に、新富座の觀棚が特等及び一二等の上客を多く迎ふることに能はざりしを遺憾とすと雖も、是れ足下の直接に興り知らざる所なるべく、且つ、之に依つて毫も柔道家としての足下の價值を増減する無し、加之、燕尾服を著けたる司會者の場慣れざるを以て、舞臺面の貫目に影響を及ぼすこと少なからざりしを、足下に向つて責を問ふ程、僕は極端に苛酷なる者にあらず、僕は唯だ、足下が千鍛萬鍊を経たる絶倫の精力と、鬼神を泣かしむるに

足れる至妙の技術とを以て、古代希臘の彫像にインスピレーションを與へたるが如き海外の力士を遇すること、恰も狗兒を弄ぶに似たるの壯觀に心酔し、拳を握つて爪の掌に透るを覺えしのみ。而も、勝敗の數を算するに至れば、三十二點に對する三十二點を以てして、未だ一高一低の位置を定むるを得ずと云ふ、咄々何等の怪事ぞ。然れども、退いて而して思へば、是れ大に據る所あらざるにあらず、元來彼我技術の範圍を異にし、加減乗除して以て兩者の相合すべき點のみを選ばざるべからざる

困難あり、其結果として、彼は脾腹若しくば顎を打ち得たるを以て勝名を占むべきに對し、我は彼が拳頭を避けつゝ、躍進して彼を擲着するに至らざるべからず、其制限の彼に容易にして我に困難なること、差や未だ闘はざるに歴然たる也、故に、足下善く闘ふと雖も、最初に於て彼の拳頭を避くべく頻りに身を轉ずるの勞あり、而も、一旦閃電的動作を以て彼の懷裡に躍入し、彼を捉へて擲着するに至りてさへ、猶ほ且つ彼には投げられ乍ら拳頭を用ふるの餘地あるに、我は擲着の上に壓住を加へずんば了れりと爲すことを得ず、其難易の差、闘つて而して

後に益々明かなるを知る、足下十戦十勝せるが如きの觀ありて、其實僅に勝敗相半ばするを得たるに過ぎざるもの、亦以無きにあらざる也。

我が柔道亦當身の術ありて拳頭を用ふと雖も、是れ已むを得ずして遁るべき奇道にして、決して道の正なるものにあらず、然るに、拳頭を用ふるは彼の術の全部也、拳頭を用ふるの外に拳闘術ある無し、況んや、眞の闘ひに當りては、躲々たる拳頭の一打善く虎の如きの壯漢を殺すに足ると云ふに於てをや、故に、柔軟にして肥厚なる手套に包みたる手に依り、フットボールの如き音響を

帶べる一打を與ふるを以て勝となすは、外觀兒戯に類するに似て、其實大に爾らざるものある也、之に對して、我も亦手套に包みたる手を用ひて當身の術を行ふを可なりとすべきが如しと雖も、彼の道の正なるものに對するに我の道の奇なるものを以てするは、既に武士的作法を蹂躪したる態度たるを免れず、加之、手套を隔てゝは當身の術も肉彈の効を失ふべし、故に、彼の一回に對するに我の一回を以てすること、必ずしも權衡を失せるの制限にあらざとせん。

果して然らば、足下鬼神を泣かしむる至妙の技術あり

とも、敵にして若し閃電の如く疾く飛ぶの快手を有せば、其躍入して彼を擲着するに至るの數秒時に於て、彼をして脾腹或は頸に一回を加へしめざるは、土砂其他の物質を用ひずして、流水の低きに就くを遏めんとすると同じく、到底不可能の事なるに似たり、一步を進めて云へば、僕が見たる試合に於けるが如き制限を以てせば、必ずしも柔道を以て拳闘術に勝ら得べきものと、定むること能はざるに似たり、是れ殆んど先天的約束也、足下が米國水兵と闘つて同點の無勝負に了れるもの、寧ろ成功の部類として見るべき也。

づるを得ざらしむるの高所に位置せりとの、絶大なる抱負を失はしむべからず、此抱負の失はるゝ日は即ち柔道の亡ぶる日也、柔道の亡ぶる日は即ち日本の士氣地に墮る日也、日本の士氣地に墮る日は即ち日本の亡ぶる日也、故に、柔道の神聖を重んずるを以て、他の術との優劣を試むることを謝するに於ては論無し、既に試むる以上は、理をも法をも超絶して、鬼となりても神となりても、必ず彼に勝たずんば已むこと能はざる也、何となれば、之を大にしては日本の存亡問題に關するを以て也。

古人は、精神一到何事か成らざらんと云へり、足下に

此に至つて、僕は一種云ふべからざる感想に打たれざるを得ず、打たれて而して後に、敢て足下に向つて重大なる責任を双肩に負はれんことを求めざるを得ず、開は何ぞや、以上の如き制限の下に於て、柔道を以て必ず拳闘術に勝つべきを定むるは、縦令先天的約束上不可能の事なりとするも、足下は必ず彼に一點をも與へずして、全勝を占めんことを期せざるべからざる也、乞ふ、僕をして其故を述べしめよ。

人と人と相闘ふに於て、柔道をして、世界何れの人種が用ふる何れの術に比較するも、巖然として他をして攀

して、眞に、粉骨壘身斃れて而して已むの徹底せる決心を有し、必ず彼に勝つべきの方法を研究して之を練習せば、今後更にアボット氏に十倍するの勁敵来るありとも、亦何の畏ることか之れあらん。

果して然りとせば、其研究すべき方法如何、彼は双手を包むに大囊を以てして、更に襪を足に穿ち、疊の上の試合に於ては、寧ろ實力以下に轉倒し易き弱點あれば、之を倒すこと左迄の勞力にあらざると共に、倒さるゝこと亦左迄の痛苦にあらざ、故に、之を倒すべく躍入する一瞬間に於ける足下の精力の消費せらるゝこと夥多なる

に比例して、之に酬はるゝ手答へ甚だ薄弱に、之が爲に足下は彼に倍するの疲勞を贏し得て、彼は常に進撃を敢てするの餘勇を存せり、此點に於ける損益の差は蓋し非常にして、試合の制限に於ける難易の差よりも、結果する所更に甚深なる也、此に於て、僕は足下の研究も亦此點より歩武を進めざるべからざるやを謂ふ、僕は、何故に足下が双手を用ひて彼が飛ばし來る右手を捉へつゝ、左方に身を轉じ、而して、後さまに彼が身に輪を描かせつゝ、振つてゝ振り廻はしたる揚句の果は、惰性を利用して引擔ぎ、彼が左手を用ふる便宜を得ざる中、蚤くも

弾みを打たして強硬に之を擲着せざるかを疑ふ、斯くして彼をして速かに疲勞を覺えしむることを計らずんば、足下の精力の消費せらるゝこと、彼に比して著るしく多く、試合の度數を重ねるに比例して、終には非常の懸隔を生ずるに至らん。

今や足下は、騎虎の勢ひ、日本の柔道を代表して外來の客に對するの位置に立たざるを得ざるに至れり、僕豈一のアボット氏に對する作戰計畫のみを言ふ者ならんや、足下が一國に有數の柔道家なるに對して、アボット氏は單に一軍艦に有數の拳闘家なるのみならず、而も足下は

記念
東京
圖書館

最新忍術と妖術終

敵の疲勞を慮りて、之と寛容なる互角の戦ひをなす、明日若し他より一國に有數なる拳闘家來つて闘ひを挑まば、足下果して如何なる態度を以て之に當らんとするや、然れども、僕の述べたる所門外漢の言のみ、正鵠を失せる點多からん、希はくば、百中九十九の誤れるを捨て、百中一の當れるを取れ、不備。

好評大二福音書

前代議士
小室重弘先生著

▲實驗と修辭の學理に基き談論の巧妙雄辯の原則を論述するものは本書▲秩序整然、聲音玲瓏、樂として輝き、克く言論に勝ち得る秘訣は本書を俟つて知る▲登壇の心得、演説の態度、思想排列法、演説組立法、言語撰擇法、聲音使用法、等詳細述べことなし

八寶驗雄辯學

菊判洋裝
定價四拾五錢
郵稅金八錢

●收而此有二卷！就職の勝策！榮達の呼吸！向上の鐵路！

官吏會社員商店員實驗立身策

四六判洋裝
定價金五拾錢
郵稅金八錢

實業俱樂部主筆
藤田日東先生著

本書は著者學業を終へ會社商店官憲新聞社に奉職し得たる實驗を緯とし懇篤に著はされたる者學校生活任用制度奉職運動法就職比較實務練習等あり就職の勝策と榮達の呼吸に至つては眞に無比人社會に立たんとする羅針盤たる寔に其名に反かず

明治四十二年八月十五日印刷
明治四十二年八月二十日發行
忍術と妖術
定價金廿五錢

著者 伊藤 銀二

發行者 東京市京橋區中橋廣小路六番地 前川 又三 郎

發行者 東京市京橋區五郎兵衛町二十三番地 杉 本 要

印刷者 東京市京橋區弓町廿四番地 高 塚 慶 次

印刷所 東京市京橋區弓町廿四番地 三協印刷株式會社

不許複製製

發兌元

東京市京橋區中橋廣小路六番地 梁 江 堂

電話本局五七七